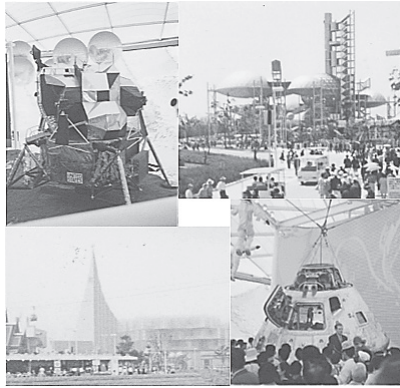


半世紀を経て、新たな検証が進む

一九七〇年三月一五日にそれは始まった



EXPO'70大阪万博 会場
昭和45(1970)年 撮影(個人蔵)

昭和45(1970)年、「人類の進歩と調和」をテーマに日本万国博覧会が開催された。EXPO'70大阪万博である。開会式が3月15日。今月はその50年目にあたる。77カ国と4つの国際機関が参加し、総入場者数は6,421万8,770人。上海万博に抜かれるまで、万博史上、最高の入場者数だった。

大阪万博が、戦後の大阪の街作りや発展に深く影響したことは言うまでもない。私は万博の年に中学に入学したが、前年には路面を走る市電がなくなり、新しくできた地下鉄堺筋線で万博会場に行った思い出がある。

では、あの巨大イベントが何であったのか。日本の現代史にどのように位置づけられるのかといった問題は、ごく限られた専門領域以外では案外と掘り下げられることなく、一般的には、万博公園に遺された岡本太郎の「太陽の塔」のイメージだけで想像されているに過ぎない気がする。

大阪大学では10年前の40周年の年に、大阪大学21世紀懐徳堂で小松左京、上田篤、今井祝雄各氏にインタビューし、シンポジウム「街育て vol.3 大阪万博40周年の検証」を開催した。

小松さんのインタビューに私も立ち会ったが、万博を見本市ではなく、文化芸術を発信する場として、世界に戦後日本の完全復興をしめそうとしたことを力説されていた。その内容は、DVD付きの『なつかしき未来「大阪万博」人類は進歩したのか調和したのか』（創元社、2012年）として刊行されているが、小松さんは翌年に逝去されたので、公開されている最後に近いインタビューではないだろうか。最近、刊行の小松左京『やぶれかぶれ青春記・大阪万博奮闘記』（新潮文庫、2018年）も、これまで知られていなかった大阪万博裏側での苦闘が記されていて面白い。

また、北摂の博物館美術館が連携する「北大阪ミュージアム・ネットワーク」では、2年前か

らEXPO'70大阪万博についてのシンポジウム開催や展覧会を企画、開催している。最新のシンポジウムでは、京都大学大学院の佐野真由子教授の基調講演で、グローバルな視点で70年万博の参加国が多い理由が分かった。1960年は「アフリカの年」と呼ばれる。アフリカで17の国が植民地から独立し、結果、万博に参加する資格を有する国が増えたのである。

さらに調べると、1967年のパリでの博覧会国際事務局(BIE)理事会で、大阪万博が海外の民間企業や国際団体を「非公式招請」したことが商業主義として問題視されたことも知った。民間企業の参加で、各国政府出展の存在感が薄れることが批判されたのである。実際、企業パビリオンのうち9館が総予算20億円以上であり、中小国のパビリオンでは太刀打ちできない。「映像と音響の博覧会」とも呼ばれ、私が圧倒されたパビリオンも大半が企業の出展であった。

一方、大阪の街の動向では、商業施設や都市基盤の整備が進む反面、前年の昭和44(1969)年、「ベ平連(ベトナムに平和を!市民連合)」が提唱し、万博をパロディ化した「反戦のための万国博」が大阪城公園で開催されている。これも大阪の歴史として見逃せない。

今後、若い人たちが新しい視点で検証していくにしても、戦後日本や大阪の複雑な問題が錯綜する70年万博を、開催時を知る立場から検証できる機会は、半世紀がたった今年をおいてもうないかもしれない。わが大阪大学総合学術博物館でも、4月末からアートを中心としてEXPO'70大阪万博を回顧する展覧会を準備中である。

ここまで書いてご報告。「おおさかKEYワード」も連載100回を越え、一冊の本にまとめて創元社から『橋爪節也の大阪百景』のタイトルで2月26日に刊行されました。自分の名がタイトルにあるのが厚かましく、「大阪的文化の地層を掘り起こす100のコラム」と過分の文句が帯にありますが、キーワードや索引で10年分の内容を振り返ることができます。ひとえに読者のみなさまのお陰であること御礼申し上げます。

筆者プロフィール

橋爪節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大分イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の幻像—』(創元社)など。